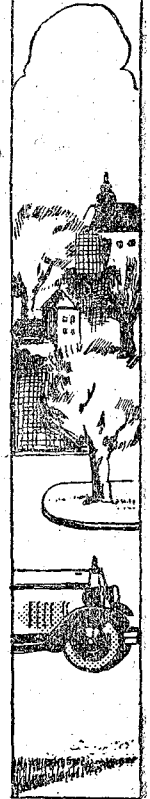


説苑



歴代内務土木局長と其時代 (十)

—長谷川久一氏—

清水生



筆者は畏友平

井洸民氏の紹介
状を貰らつて、

長谷川久一氏を

小石川區小日向

臺町の邸を訪う

たのは去る十月

の或る日であつた。その訪問の用件は云ふ迄もなく本誌に

説苑

毎號連載してゐる「歴代内務土木局長と其時代」の執筆に

付いて、長谷川氏は故堀田貢氏の後に土木局長の椅子に据

つたから、これまで氏には全く一面識もない故に一度面會

して親しくその警咳に接したかつたためである。筆者は澁

谷驛前から早稲田行のバスに乗つて夫れから終點で下車し

て、交番等で尋ねて氏の邸についたのは其日の午前十時頃

であつた。玄關に立つて取次の女中に紹介状と筆者の名刺

とを渡して來意を告ぐると間もなく二階の應接室に通され

た。主人の現はれるのを待つてゐる間に誰れが書いたか一寸忘れたが「自強不息」とある扁額の筆力等を見てゐる間に主人長谷川氏は何所かに外出されるのかモニング姿であがつて來て茲で筆者と初對面の挨拶を取交したのであつた。その印象は筆者には非常に感じがよかつた。全く初對面といふよりも永年の知合であるやうな印象を受けたのであつた。氏はその風格は大きく俗界を超越してゐるやうに感じたが、しかも非常な優しきと親しみを以て女中の持つて來た紅茶を共に喫しつゝ互ひに語り合つたのであつたが、これが筆者にとつては非常な愉快であつた。

僕が土木局長になつたのは左様今から考へたら随分前で確か大正十一年の六月頃であつたと記憶するが、土木局にはその以前から大變永く御厄介になつたよ——堀田さんが警視總監になつてその後僕が土木局長になつたのじやが、僕見たやうな平凡のものがその職についたといふのも河川課長や道路、港灣課長等土木局の各課長をやつたのでいわば自然の順序でなつたやうなものぢや。

と氏は頗る謙遜的に局長になつた経緯を語つて、更に言葉を次いで、

僕の土木局長時代は實によく皆が一身同體になつて働いてくれたものぢや、これには今でも常に感謝してゐる。元來土木局の仕事は中々意義のある、面白い仕事ではあるが一面に於いてつらい仕事でもある。本省にゐる連中は左程でもないが各河川改修工事——治水工事などで實際これに直接當つてゐる連中は山間僻遠の地で冬は寒風凜烈肌をさくやうな時でも河土堤の假堀立小屋で多數の土工を擁して仕事することは實に容易のものではない。特にあの關東の大震災の時などは全く必死の働きであつた。

と氏は茲で現業員の苦勞に對する同情のことばを語つて後

加藤友三郎さんの内閣が出來た時に水野さんが再び内務大臣になられたが、その時水野さんが故堀田さんと赤池さん「濃」とを呼んで内務次官と警視總監は二人の内

でどちらかゞなるやうにと云はれて堀田さんが警視總監の方を引受けられたやうに聞いてゐるが、その後私の方やうな平凡の人間が土木局長となつたのであつたが、堀田さんと赤池さんは實に立派な人物であつた。

こゝで亦話は轉じて、

郡制廢止の結果郡道を町村道に下げるか縣道に上げるかに付いて、この時は中々地方ではやかましい問題であつた。地方の有志等は續々上京して縣道に早く編入してくれと一ち々々その理由を陳情のために内務省の廊下は度々あつた。茲に面白い話は當時内務省の食堂は省員でも行く人が少なかつたのか、あまり振はなかつたので困つてゐた。然るにこれ等地方の陳情者は廊下といはず、食堂にも頑張つて毎日食堂が一ぱいになる有様であつたから、その御蔭で食堂の不振を取りもどしたやうなこともあつたとのことも聞いた。僕のこの宅にも時間がなくて役所で面會出來ぬ人々が澤山陳情に見へたが、中には

舊藩の何々伯爵とか子爵とか云はれる人や貴衆兩院に籍のある人々が毎日のやうに見へて郷里のために熱心に盡されるのには感心したのであつた。この問題は全體に於て約七割迄は縣道に編入して、どうしても交通上其他種々の理由に依つて縣道に編入出來ないで町村道としたのは約三割位であつただらうと思ふ。夫れから亦僕等が前には一寸云つたやうに現業視察に行くことに喜んで歓迎を受けたものぢや——北上川改修工事の視察に行つた時に石巻で僕の歓迎會を全線に從事してゐる技師技手や現業員が集まつて開いてくれたが、勿論田舎ではあり質素ではあるが中々趣味豊かで相互に意見の交換をして親密の度合を増すと共に仕事の統一やその他種々の點で効果のあるものである。何か機會がないと同一河川で仕事に従事してゐても一同が同一場所に集る機會は僻地では極く稀れであるから本省から來た人の歓迎會に名を藉つてこれを機會に一層親睦を厚くし亦仕事上の意見の交換等をなすのである。吉野川の改修工事の視察に行つた時で

も同様の有様であつたが、徳島に毎晩のやうに技師等が集まつて滞在、中僕を中心として意見の交換や打合せ等をやつてくれたので、相當効果が擧つたやうであつた。名は歓迎會といふても田舎の頗る簡單質素な料理で同一職に携はるものと一同に會する気分も亦捨て難いものである。

こゝで氏と筆者との話しは次から次々とはずんで來たが、

國土計畫といふて今やかましく云つてゐるが、僕の土木局長時代に京都の人で吉田幸三郎といふ人が琵琶湖の兩端を切り開いて敦賀大阪の大運河を開鑿することは日本の將來のため絶対必要であると熱心に主唱してゐたが、それは是非共將來國力の發展上必要なことであると思ふてゐる。この運河開鑿の結果琵琶湖兩沿岸に約五十五萬町歩の沃土が出來上る。然し克く調べて見ると北からトンネルを掘るのだが日本海の水は約八十五尺程琵琶湖の水よりは高い、然しこれは克く調査研究してやりよるに依れば出來んことではない。この意見を持つてゐる

人は世間では相當にあるやうであるが、そうして千噸位の船が自由に日本海と大阪灣とを直接往來の出來得るやうになれば運輸經濟に於ても亦物資の輸送に於ても更に沿岸の開拓に於ても相當國益になることは確であると思ふてゐる。財政の上に於て中々そこまで事は届かんか知らんが發展の日本が將來必ずやる仕事の一つであると思ふてゐる。米國のパナマ運河を見てもこの必要は一層感じられるのである。

氏との話しはこゝまで展開して來たが、時間も多分經過して居り突然の訪問で氏も亦何れかに外出されるのか洋服姿であつたからこの位にして辭去しやうと筆者は「この頃は時局で御多忙でしやう」といつたら氏は、

此頃は浪人してゐるから別に定まつてこれといふこともないが、夫れでも消防團や警防團等に講演を依頼されたり、亦其他の雜用が出來て多忙である。町會長も是非と云はれて引受けてゐるので、これでも中々いそがしいよ。

と、呵々大笑されたが餘程時間も経つたので、まあこの位にしてと思ふて辭した。尙氏の語つたことはこの外にも色色に亘つて談笑したが餘り永くなるからこゝでは省略することにした。茲で例によつて氏の略歴を見ると、

長谷川氏は舊九州肥後唐津の藩士長谷川芳之助氏の長男として、明治十七年一月に生れてゐる。氏の尊父芳之助氏は安政二年に唐津に生れて、幼にして蘭學と數學を修め更に英學を何禮之に受けて大阪開成學校に入り後ち其の助教授を命ぜられてゐるがこの時は年僅か十六歳であつたとのことである。後ち藩命を以て東京に出で、大學南校に入り理化學の研究をなしたがその英氣と才學を以て衆生を抜いてをつたとのことである。明治八年には選拔されて米國に遊學してコロンビヤ大學に留まること五年、主として鑛山學を修めて歸朝後間もなく官界に入らずして高島炭鑛吉岡鐵山に従事してゐた。後ち三菱の本社に入つて鑛山部長となつてゐる。明治廿九年には三菱を去つて故郷唐津で獨力で鑛山業を營み、亦三十五年

には鳥取縣から選ばれて衆議院議員に當選してゐる。軀幹は長大にして志氣豪放磊落で夙に憂國の志ありて其の専門は鑛山の學術及び事業にあつたと雖も旁ら好んで政治經濟宗教等を收めて常に國家主義を主張し諸方に奔走する所があつた。かの廿七八年日清戰役の起る際に自から海軍軍令部に赴いて鯨獵船を以て水雷を使用するの建策をなし、亦日露戰役の起るに先き立つて政府の政略は緩慢であると叫んで有志と共に對露同志會を起して全國人心の作興に勉めたり或は日韓合邦の未だ成らざるや對韓同志會を作つて時の政府當局者を激勵するところがあつた。晩年小村壽太郎氏の對米策に慚らずして同志を糾合して太平洋會を組織して大に政府の外交政略を攻撃する等國士の氣慨があつたが、大正元年八月に年五十八歳を以て歿してゐる。久一氏は斯様の人を父として生れてゐる。明治四十年に東京帝國大學政治科を卒業して直ちに高等文官試験に合格して内務系統に入り、其後千葉、三重兩縣の警察部長、警視廳第二部長、同保安部長、岐

阜縣内務部長等を経て本省に入つて内務監察官、土木局長に就任し再び地方に出て石川、和歌山、長崎、静岡等の各縣知事を経て東京府知事に就任、昭和七年一月に警視總監となつたが間もなく辭して爾來在野の人として活躍されてゐる。自家の宗教は眞宗で氏は漢詩を克くし、亦ゴルフ等にも相當趣味を持ってゐるやうである。氏の夫はまさ子女史は嘗て屢々兵庫縣から衆議院議員に選出され憲政會時代の幹部であつた小寺謙吉氏の令妹で、神戸女學校の卒業者である。長男眞一氏はやはり東京帝大を卒業後目下三井物産に奉職してゐるが長女あき子さんは東京府立第二高女を卒業後間もなく鳥取縣人で醫學士杉埴三郎氏に嫁してゐる。其他二男三男も東京帝大卒業後三菱信託其他に夫々勤務してゐる。従三位勳三等は氏の現在叙せられてゐる位階勳等である。

偕て長谷川氏が故堀田貢氏の後を襲ふて土木局長になつたのは、大正十一年六月十四日である。時の内閣は嘗ては日露海戦に於ける聯合艦隊の參謀長であり、亦ワシントン

會議に於ける首席全權として何づれの場面をとるも國家の運命を双肩に擔つて重大なる役割を演じた、彼の加藤友三郎氏の所謂加藤内閣であつた。この内閣に水野鍊太郎氏が大正十一年六月十二日に内相の椅子にすわつてから二日目であつた。そうして加藤内閣の次に生れたのは、明治以降海軍に於いて英雄型の武將と稱せられ、日清戰爭にも亦日露戰爭にも只だ一度も戰陣に臨まずして英雄の名に關聯される武將としてその容貌膽略器宇行藏は確かに一世の雄といつてもよく、亦現役當時には所謂長の陸軍を代表する山縣有朋公に拮抗して所謂薩の海軍を代表して海軍の大御所と世間では云はれて毀譽褒貶の嵐の中に屹立した巨巖として海軍大臣たること足掛け八年、首相たること前後二回、シーメス事件で失脚するまで實に海軍の羅馬法王の觀があつた山本權兵衛氏の内閣であつた。この内閣にはこれも一代の傑雄後藤新平伯が内相として列し、その下に長谷川氏はやはり土木局長としてその職にあつたが、大正十二年十月廿五日に長岡隆一郎氏と代つて氏は地方長官として石川

縣知事に赴任したのである。

而して當時氏の土木局長時代の内務首脳部は即ち加藤内閣では水野鍊太郎氏の内相の下に、次官は井上孝哉氏、地方局長は潮惠之輔氏、警保局長は後藤文夫氏、神社局長は山田準一郎氏、衛生局長は横山助成氏等の顔觸であつた。次の山本内閣に至つては内相後藤伯の下に塚本清治氏が次官である。潮惠之輔氏は地方局長としてやはり留任し、警保局長は後藤文夫氏に代るに政友會の幹事長であつた岡田忠彦氏がなつてゐる。神社局長も亦山田準一郎氏が衛生局長に轉任の後を受けて大海原重義氏がなつてゐるが、氏は中程の大正十二年十月二十五日に長岡隆一郎氏と代つてゐる。斯く見れば長谷川氏の土木局長在職は約一ヶ年と三月間である。而して筆者は初代以來の土木局長を通じて最も難局に立つたのは氏であると頗る同情してゐるのである。夫れは彼の關東大震災の突發は氏の土木局長在職中に起つた未曾有の一大慘事であり、亦河川治水其他土木事業に互る一大破壊であつて、これが復舊整備は中々容易なことではな

いのであつた。氏は當時交通部長を兼任して總局部員として臨時震災救護事務局の幹部として晝夜を別たす最大の努力をした功績は没すべからざるものがある。併し乍ら充分なる手腕を發揮すべくその期間を與へられずして震災後僅かに二ヶ月に足らずして土木局長から石川縣知事に轉じて長岡隆一郎氏にその椅子を譲つたのは當時の土木復舊工事の行懸りから觀察して遺憾であると思ふのである。あの大地震災のために國家的土木工事としてはその機關は一時停頓したのではないが、これがために種々手控になつたのも事實であつた。これは前號堀田氏のところでも一寸書いて置いたが、一例を挙げれば政府は大正八年道路法を制定すると共に道路會議の意見を徴して道路改良計畫を樹立し道路公債法を制定して道路の改良を策するために、大正九年度以降三十年間に互つて公債を財源として國費三億八千二百八十萬圓を以て軍用道路約七十里、國道約千七百里、特殊の事理ある府縣道約四百里及び六大都市の街路改良事業を助成するために一定の年度割を以て道路改良のために國費

を支出することを決定して、これが財源は道路公債法に依つて毎年度豫算の範圍内で公債を募集して、これに充當することに定めたのであつたが、この計畫は大正十一年度までは豫定計畫通り實行することが出来たが、氏が在職時代の、大正十二年度に於て起つたあの關東の大震災のために政府の財政緊縮の結果、その成立豫算額六百七十五萬圓を五百六萬餘圓に實行を制限せられたのである。これも亦土木局長としては仕事の上に於て多少の阻誤を來たしたのであらう。しかしながら氏は道路に關しては元より種々苦心をしてをり亦震災以前に着工せる高松港、境港、敦賀港、今治港、小松島港、鹿兒島港、伏木港等の各港の各改修築工事は續行してをり、亦淀川下流の改修工事は氏の時代に竣工せしめてゐる。更に他面土木事業従事員共濟組合規則を制定して現業員が安じて土木工事に就職する安全辨としたのも氏の功績の一つに數へてよいと思ふのである。

亦我が道路改良會のためにも道路の改良發達上益々本會の如きは國家に必要な機關として會の發展に努力し、復

港灣協會の創立にも參與し我國港灣の改善發展上に力を盡してゐるのを見て、土木局長在職時代にも亦その以前河川港灣道路の各課長時代でも大に盡力されたのである。現に只今でも氏は本會では評議員であり、港灣協會では常議員とされてゐる。これも亦氏の道路港灣等に盡した功績の一つであると云つて差支ないと思ふのである。

長谷川氏は土木局長を去つて以來氏の略歴が示すが如く石川、和歌山、長崎、静岡、東京の各府縣知事を歴任後に帝都治安の重責を帯びる警視總監に就任してゐるが、その就任した直後に署員に敬神の念を植付るべく同廳五階の正面に神棚を設けて署員一同に禮拜させたのを始めとして、頗る突飛なる言動をなしたとの故を以てその常識を疑問視されて就任後間もなく退官するの餘儀なきに至つたのであつたが、筆者は氏と會見したことは僅かに一度であるけれども筆者の見るところでは氏は屬僚的官僚思想を超越して比較的大人物なるが故に眼孔豆の如き周圍から我が國の警視總監としては百年も後ちならざらばいざ知らず、當時に於ては

當抵容れられざるものとの非難攻撃をされたのであるまいかと思はるゝのである。聞くところに依るとかやうに酷評を浴びた神棚は其後徹廢もされずに神の葉も益々青く署員敬神の的として立派に存在してゐるとのことであるが、時局以來益々敬神の念を盛ならしめ、國體の精華と敬神の念を益々涵養してゐるのを見て氏は先見の明を誇つてもよいと思ふのである。氏は亦時々雜誌等に投稿してゐるが、これを見ても中々抱負見識のある文章家である。その一二例を抜萃して見ると、氏は「皇紀二千六百年を期する道路改良」と題して先づ、

ムツソリーニ首相が自國の國粹を尊重すると同様の意味に於て友邦の建國記念滿二千六百年を重要視する理解力のいみじきに對して絶大の敬意と感謝を表せざるを得ない。察するに現下の世界的情勢は各國民の責務の上に建國的意志と努力との強烈なるを要すること、いよ／＼切實必至なるを思はしめる。滿洲帝國の伸展、支那最近の對日一轉機のごとき、世界各國互に共存共榮相援引し

て夫々其の歴史的認識を深めしむることに協力するの必要より來れるは論を俟たず。

と書き一時は殆んど絶望視されてゐた第十三回オリムピツク大會が光輝ある二千六百年のよき日をトして東京市に開催さるゝに有望になつたのは、ムツソリーニ首相の多大なる盡力に依る結果であると述べ、更に次いで、

抑々世界列國の都市のうちでローマ程政治都市、又支配の都市として特徴を發揮したのは蓋し少ないであらう。論者はよく言ふ、ローマの都は何物をも創造しないではないかと、ギリシヤのアテネは實は小さいながらも立派な世界的精神の搖籃であつた。然るにローマに至つては世界的なる大帝國の首都ではあつたが、そこには何等見るべきに足るべき精神的所産を残してゐないのだとその意味から言ふならば、ローマは確かなる石女であつたかも知れないのである。併しながら東方パレスチナの一角に發生した基督教を世界的宗教まで之を組織的に發展せしめたのに疑ひ無くローマの賜物に他ならない。

と論じ、更にローマに付て詳述の後ち

ローマの世界大統一理想はこのジュピター崇神の裡によく窺ひ得べきである。この中心地に使徒ペテロの入り來つたことはやがて同教か世界教たるに至る素因をなすものたるは疑を容れざる所である。ローマを出發點として同教は十字架を高く振り翳し此の世界におし擴まつて行つた。道路を歩むものは半里に一度か一里に一度は路傍の十字架に跪き一路平安を感謝し、祈念するのであつた。犠牲的信仰の表徴たる十字架が先頭に立ちつゝ、道路はかく四方に築造されて行つたのである。

と宗教と道路關係を説き最後に、

皇紀二千六百年こそは多幸なる哉である。此の歳を以て萬國大博覽會とオリムピツク大會とか併はせ開催せられんとしてゐる。併し博覽會も大會も孰れも是れ一時的のものに過ぎない。ムソリーニ首相の絶大なる好意に答へ、伊國民の濫き友情に酬むんが爲めには吾人は須らく此の歳を期し道路記念祭を行ひ、道路改良の實を擧ぐる

と同時に改良熱を彌が上へにも鼓吹すべきであらう。古き久遠の都ローマに對する吾人の責務は文字通り實質的舉國一致を以て其の教へを學ぶことであらう。殊にその道路文化に於て一層切實的確なる準備をととのへて、以て此の世界的寄託に副ふべきを痛感して己まないのである。

と結んでゐるが、勿論氏かこの稿を書いたのは昭和十年二月であるから、現に今日の情勢と當時の情勢は多分に異つては居り、現に萬國大博覽會も亦オリムピツク大會も當時は東京に開催することに定まつたが、其後時局の發展に連れて開催を中止するの止むなきに至つたのであるが、氏のこの論旨に至つては時局は今尙何等變つてゐない。殊に「吾人の責務は實質的な舉國一致を以て其の教へを學ぶことであらう」と言ふが如きは全く今日の時局に對應するもその通りである、亦將來に於ても是非かくなければならぬと思ふ鐵則である。只だ筆者を以て忌憚なく言はしむれば爲政者は所謂國民に一億一心を唱ふると共に、爲政者夫れ自身

も亦國民が全く心から感じ慕うべき所謂善政を施すことは忘れてはならないことを痛感するのである。氏はその外にも「平和への道」、「空路か道路か」、「われらの大共榮園竹取物語を描けるグロースラウム」、「出島の回顧」等々と題して平和のためには道路の必要を説き、或は皇紀二千六百年の好年に際會して一億の民草は決して武帝の朝人の愚を學ぶべきではないといふことを痛感すると警告し、殊に出島の回顧の總ては、リーブチ號によつて開かれたる、日蘭間の通商關係から鎖國後も出島の猫額大の地域を通じて細々ながらも日蘭貿易を繼續されてゐた出島の由來を述べて、沉んや鳴瀧塾に來り學んだ高良齊、二宮教作、戸塚靜海、竹内玄同、伊東玄朴、伊藤圭介、高野長英氏等の俊秀が日夜孜孜と勤勉して本邦文化の先驅たる尊き使命に精進したるその功績も島津齊彬が維新に際して樹立した勳功も出島を發する蘭學の造詣に負ふ所尠少なからざるを知るのである。と書き、最後に

米國大統領ルトズベルト氏は本日聲明を發し「世界に

説苑

於ける幾多の小國もそれぞれ自主的にその主權を享受し得べき平和態勢を切望す」と江湖に訴ふところがありわが國の評論家馬場恒吾氏は今朝の讀賣日曜評論に「東西古今或る民族が他の民族を長く支配し得た實例がない。こちらで思をきせてやる積りでも、向ふが有難がらぬ、一寸の蟲にも五分の魂とやら、他人の善政より自分の惡政の方がよいかも知れぬ。殊に強國はその進駐し行く先々の土地に果して善政を布かうと思つてゐるかどうか疑はれる。小國は小國ながら獨立國家としてその文化をもつて人類の進歩に貢獻するがよいと思ふ」といふ意味のことを力説してゐる。出島の回顧を試みるとき吾人は和蘭に對し特にこの感深きを覺ゆるのである。と氏は昭和十五年四月に發行された、港灣協會の機關誌「港灣」に書いてゐる。

筆者は前にも一寸と斷つて置いたが、筆者と氏とは只だ二時間ばかりの一度の會見であるから自然氏の人となりも熟知せずと云ふてよいのであるが、前記の如く氏の書いた

ものを二三讀んで見ても、氏は哲學宗教を加味してこれ等の見地から人類至大の平和への道を説いてゐる。等々と所謂屬僚型の官僚人とは稱や趣きを異にしてゐるやうに思はれる。初對面に受けたる印象も斯様に感じたのであるが、若し夫れ筆者をして率直に云ふのを許さるゝとせば、氏は決して力山を抜き氣は宇宙を呑むと云つたやうな英雄型でもなく、或るは快刀亂麻を斷つ俊異のやうにも感じないが然し亦氏が筆者と會見の際氏自身謙遜してが言はれた如く「私の如き平凡な者云々」は當つてゐないと思ふのである。筆者の見た氏は軀體長大にして悠々迫らざるの感がある。亦何所かにか太き線のあるところが見受けらるゝその性格は篤實にして事に當つては努力勤勉不屈不撓の精神を有して何事に依らずその携はれる仕事には誠實以て事に當るといつたやうなところがあると思はれる。しかも話の内時々見受らるゝところは相當の知識才能を有して事に當つては夫々の抱負識見を持つてゐるやうに思はれたのであつた。茲で一寸と例を引くには餘りに大き過ぎるかも知らん

が、元來人間といふものは如何に力量があり識見があり知識才能が優れたものでも、世に認められずして一生涯を朽ちるものも多くあり、亦これと反面に夫れ程才智力量がなく識見抱負も持たざる所謂凡庸の人物でも出世榮達してゐるものが多くある。あの河内の國の土豪であつた楠正成も、後醍醐天皇の夢占に従つて、笠置寺の快元和尙や藤原藤房卿あたりが推挽をしなかつたなら、建武中興の偉業を成し遂げることは出来なかつたであらう。越前の英傑で春嶽の懷刀と目された橋本左内にしてもその背後に越前侯が出来なかつたならあれ程思ひ切つて國事に盡瘁することが出来なかつたであらう。これを他國の例に取つて見ると難を荆中に避けて躬ら隴畝を耕してゐた諸葛孔明も劉備玄德の三顧が無かつたならあのやうな殊功を樹て忠武の名を千載の後に傳へることも出来なかつたであらう。適材適所は理想であるが中々にその實現はむづかしいのであるが、これを見出して適所に置くことは一層今日の時局に於てその必要を痛感されるのである。適材として見出される者、

亦適材として見出す者、この兩者の風雲の會は容易に發見されるものではない。先づ天運と言ふかその人々の運命といふか何れも適當の言葉であると思ふてゐる。これは筆者は嘗て新聞記者であつた時代にその仕事の關係上幾多の人物にも面會をしたり亦諸會合等に案内されて種々の人物にも遇ふて感じたのが思ひ當たるのである。夫れは一々例を擧げてこゝで書くのは遠慮をするが高位高官の人であつてもこの人が克くもこのやうな地位にまで行けたものぢやと思はれたことも屢々あつた、亦その反面に於てその地位は左程ではないが遇ふて見てその識見と言ひ抱負と言ひ亦その態度といひこの人が今未だに世の中に認められずしてかやうに下位にゐて所謂世の中の下積にゐるのを見て世の中といふものは按外不公平なものぢやと思ふたがこれも亦天運に恵れないともいへよう故に人物の賢愚は決してその地位や其他に寄るものでないと痛感した。

今や我が帝國は聖戰既に第四年の秋を迎へて新に日獨伊三國同盟は締結されて相携へて世界人類の恒久平和と繁榮

のために世界新秩序の建設に向つて邁進してゐるの時に當りこれを拒まんとする敵性國家の暗躍はその跡を絶たないのである。四圍の情勢は益々緊迫を告げ、事變の前途は未だ遠かに安するには至つてゐない。その際國民は一體となつて更に一層の決意を昂揚して未曾有の國難に當るのは當然過ぎる程當然のことである。然してこれ等を思ふと共に一層切實に國家良材の輩出を願ふのである。時局國家興廢の岐れる處は單なる物質でもなくて亦貨幣でもない。所謂一億國民をしてその向ふ所をはきりとした目標の許に進行せしむる優良なる指導階級が存在である國民生活の安定と時局は決して兩立せざるものではない。思を茲に致して眞に毀譽褒貶を度外視して赤心國に酬ゆるの土を選び出すことは亦爲政者として國民に對する義務ではなからうか。筆者は今尙在野には尙幾多の賢者は隠れてゐると思ふと共に切にこの感を深うする次第である。